

## 第20回 Kozoomサロン テーマ「身辺整理」

清水健二

人生の終末期を迎えて「身辺整理」は 言うは易し 行い難しである。

私達の子供時代は、生活に必要な物は大切に扱い、壊れても手直しし繕って使ったものである。親の代の物はそのまますべてに受け継がれ、身辺には使い慣れた物で十分生活ができた。戦後米国の生活様式が取り入れられると共に、経済発展に伴って食生活の変化や、衣服のみならず身の周りの物が豊富になり、次から次へファッションや利便性の高い物を求めるようになり物が増えてきた。今や何処の家庭でも物だらけを呈してきて始末に困ってきている。

30～40年前頃の日本は、家族構成として親子、孫の3代が同居して暮らしていたものだが、核家族の生活が一般的になると生活用品等は新しい物を購入して独立し、子供は成人して独立し、親から引き継がないから終末期は処分を余儀なくされることになってしまった。

断捨離という言葉が流行り出したのは10数年程前だろうか。日頃使用しない物は思い切って捨てなさいということだが、そう簡単にはいかないものである。思い出の詰まったものは、思い出まで捨てるということになるからである。私は生きている限り最後まで残しておけば良いという考えを持っている。少々迷惑になるかわからないが、自分が他界すれば、灰にされるのだから、身の周りのものは他人様に処分してもらえればと思っている。

人は誰も自分が歩んできた証を残したいと思っている。自叙伝を書いたり、自分史をしたためて、よく頑張ってきたと自分を褒めて、旅立ちたいのが人情というものだろう。かと言って容易に自分の生きてきた証を残せるものではない。また学校時代から社会人になってもよく勉強した人は、教科書や参考書、学術書は捨てられないし、読書家にとって書籍は自分の伴侶だと思っているから、愛着があって処理し難いものである。あえて無理な断捨離は止めるほうが良いと私は思っている。自分自らを捨てるようなものだから。

私は、何代か続いた清水家の跡取りで両親と共に生活してきた。今は夫婦二人で気楽に過ごしているが、嫁いだ娘二人と孫は一人だけである。従って清水家は私の代で消えていく。家と共に仏壇は壊され、現存する墓は ゆくゆくは無縁仏の石塔となるが、これは仕方がないことである。娘達に後を継がせるわけに行かず詮無いことと諦めている。

しかし夫婦で築き上げたささやかな動産、不動産は子供達や後継者にきちんと書き残すことは、今まで生きて来れた感謝に報いることの務めだと思って進めている。

私は、若い頃から親父の影響もあって物づくりが好きだった。50歳近くになって親父を亡くした頃、縁があって彫刻家に出会い、趣味で彫刻をやりはじめた。手ほどきは仏像彫刻だったことから、休日に指導を受け楽しみながら取り組んだことが その後の私の人生に潤いを持たせてくれたと思っている。彫刻を始めて数年後、観音講の本尊である観音菩薩像の造像依頼を受けて、休日をもっぱら制作に当て、無事奉納でき講の人達に感謝された。定年後は本格的に取り組む、在住する近くの古刹寺に地藏菩薩像を寄進したり、知人から持念仏を要請されて進呈することが増えた。そして私が生きた証が残ると思うと何故か安堵したものである。仏像に限らず一般彫刻にも進展し、記念に成る作品を制作して差し上げることも多く、拙い作品であっても喜んで貰えば嬉しく、善行した気持ちになり一層作品づくりに精が出たものである。一方美術展への出品作品の制作にも追われ充実感のある生活を送ってきた。

制作に当たって設計図や関連資料と共に、作品数も多く貯まりはじめ押し入れからはみ出し、空き部屋を占領し今や手がつけられなくなっている。一つ一つに思い出があり、次はこれよりもっといいものにしたいという意欲が出てきて止まらない。自分でガラクタと思いながらも捨てられない。まして美術展に出品し受賞し、高い評価を得た作品や、愛着のある作品は捨てるなどはとてもできない。せめて他人様にもらって、少しでも整理したいと思っているが、多くは私が彼岸に旅立ってから処分してもらおうつもりでいる。

先日アルバムを見ていたら、孫の1歳の誕生日に記念で彫って贈った作品の写真が出てきて、



孫への誕生日記念作品

その時次女の娘が喜んでくれたことを思い出した。いつの日か孫が「俺の爺さんが作ってくれたものだ」と私の存在を思い出してくれればいいと、下手な作品でも私を偲んでくれるだけでも何か心安まる気持ちになった。

ここまでは、私個人の「身辺整理」の話だが、少し視野を広げて芸術家の「身辺整理」のことを書いてみたい。

私は八尾市に住み、大阪万博が開催された1970年から急速に文化都市を目指し始めた。もともと河内の中心地域で伝統芸能の盛んな所である。特に八尾の地は江戸時代から綿の産地で木綿を作っていた。そして織物や染色工芸の卓越した技術を有し、20年程前にはロシアのエルミタージュ美術館で、「ジャパン ブルー」として高い評価を得る程の美術工芸品である。



ジャパン ブルーの藍染と文様美

日本の素朴な木綿藍染工法と幾何学的図案の技術は見事である。しかし市場は低迷し厳しい状態になったが、保存会の人達は熱心に継承活動をされている。郷土文化を経済効果の大小で取捨選択しない姿勢に私は心より敬意を表している。

50年程前に文化芸術を重視した政策を指向した市長が現われて、八尾市に文化連盟という大きな組織が設立された。それまで細々と活動していた各団体や伝統芸能や技術、工芸などが組織の中に入り規模も大きくなって、各地からアーティストが集まり急速に芸術・芸能が盛んとなった。

私は現在、絵画、彫刻(立体造形)、陶芸分野を包含した美術協会に所属し末席を汚しているが、他に写真、書道、クラフト工芸、染色工芸等などの分野の会員との交流もあって勉強することも多い。しかし共通した悩みとして自作の作品の保管や処分の問題が大きな話題になっている。絵画の分野では、油彩画等100号や200号という大作を展覧会に出品してもその保管に困っている人が多い。著名な人なら10号以下ぐらいなら買ってもらえるが、並の画家の作品等はほとんど声

も掛からないという。高度経済時代には公共団体や企業、一般の人でも購買力が高かったので、作品も売れ創作にも張り合いがあったという。

私は彫刻以外に絵画にも興味があつて指導を受けているT先生がおられる。1928生で超高齢だが、今も意欲的で制作にも積極的に活動されている。近隣都市でも知名度は高く、多作な方だから作品の保存が大変である。このT先生が2度に亘ってドイツへ旅行されて描かれた絵を、徳島県鳴門市にあるドイツ館で個展を開かれた。題して「ドイツ風景(ロマンチック街道)洋画展」である。閉会後はそのまま作品を寄贈されたのである。その話を聞き素晴らしい処分の仕方だと感心したものである。

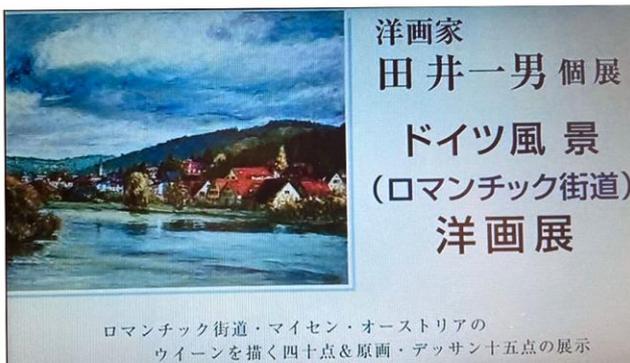
ドイツ館の地は、約100年前、第1次世界大戦で、ドイツの兵士1000人程の俘虜収容所があつて、地元の人々がよくお世話をし、非常に友好的だったことから、兵士らによって地元に橋が建設



ドイツ館



ドイツ橋



洋画家  
田井一男 個展  
ドイツ風景  
(ロマンチック街道)  
洋画展

ロマンチック街道・マイセン・オーストリアの  
ウィーンを描く四十点&原画・デッサン十五点の展示

T先生の洋画 個展から



されたり、地域の人々はドイツの生活様式を学んだりしたという。日本で毎年暮に演奏されるベートーベンの第9交響曲がこの収容所から始まって広がったそうである。

ドイツ文化の展示場としてドイツ館は歴史的建造物として建設された。T先生はドイツの風景を描いた作品を日独友好の橋渡しにしたいと寄贈され、それを受け入れられた館長も素晴らしい人だと思っている。T先生は積極的な行動によって自分の作品が生前に文化遺産として残せるなど画家冥利に尽きると痛感したものである。

私の彫刻の恩師 S先生は著名人として、日本の成長期に活動されていたので、作品は奈良、京都や各地で出会え、モニュメントとして多く残っている。S先生は生前から評価され幸せだったと思うが、その門下生の多くは時代の流れの中で悩みながら制作している。

ゴッホもゴーギャンも現在では絵画の巨匠である。しかし生前は売れない絵描きで、貧乏と絶望の日々を過ごした。しかし時代が変わることで人々の価値観も変化し、作品の評価も見直されて一躍現代の画壇の頂点に成っている。小説家にしろ作曲家にしろどんな分野の作品も、焼却処分しては全ては無になる。文化財は形があってこそ価値がある。自分の分身としての作品は1点でも2点でも残していく方法を考えねば文化財として残らないと思っている。

古いものは捨て、新しく利便性のある物を求める傾向の強い戦後の人達と一緒にあって、年寄りが時代遅れだと断捨離をやるべきでないと思う。古いものの中に生活の知恵があり、伝統文化を大切に継承する人々を支援し、生活に潤いをもたらす文化遺産を大切にしていくことを教え育成することに尽きる。郷土文化としてのジャパン ブルーの工芸技術や、鳴門市のドイツ兵士と地元の人々の交流が国を超えて、文化の種を残してくれたことを、我が子や若者達に伝えて行くことが、年寄りの役目ではないだろうかと思う昨今である。

令和4年2月記